人にやさしい家電機器を求めて

——90年代は、そして21世紀には——

I. 人にやさしい家電機器

伊 東 陽 — (松下電器産業(株)ヒューマンエレクトロニクス研究所)

1. ま え が き

それぞれの時代の人々の欲求とともに、常に進化してきた家電機器。物があふれ、経済的に豊かになった今日、人々は、これまで以上に、より人間・生活を重視した物づくりを求めている。

本稿では、人々の欲求の進化という視点で戦後から今日まで、家電機器に何が求められ、そして現在から将来にかけてどんな対応が必要なのかを考えてみた。

2. 戦後から今日まで

戦後すぐは、とにかく「生きる」という最低限の基本欲求を満たすために人々は働いた。

1950年代も半ばに入り、戦後の混沌も落ち着きを取り戻し、人々はより生活基盤を充実したいという欲求を持った。そういう時代背景のなか、アメリカ式のライフスタイルとともに家電機器が普及していった。3種の神器の時代である。広く、清潔で、明るい家。家のなかでは便利な家電機器を使いこなし、休日には家族そろって車で外出する。そんな物の豊かな、アメリカ式のライフスタイルにあらがれ、いつか自分達も実現したい。まさに家電機器は人々の「夢」であった。

1960年代に入ると人々の欲求は更に進化し、より良いモノを求める。3Cの時代。すなわち、カラーテレビ、クーラー、車の時代となる。

1970年代、日本は高度経済成長のまっただ中、家電機器をはじめとする工業製品も潤沢になり、人々の選択できる範囲も大きく広がった。メーカーは次々と新製品を市場投入し、人々はより新しいもの、より人と

図1 家電製品の普及率と物の豊かさ、心の豊かさ

違ったものを求めて家電機器を購入する。そんな差別化欲求の強い時代であった。

1980年代に入ると日本の経済ベースが急速に拡大する。人々の周囲には物、サービスがあふれ、経済的にも豊かになった。戦後の人々の生活の夢、目標であったアメリカ式のライフスタイルは既に実現され、人々の求める豊かさが大きく変化した。図1は総理府が行った世論調査の結果である。1980年代に入り、人々の求める豊かさは、物から心へと大きく変化した。

家電機器への人々の要望も、人と違ったものというより、自分が好きか嫌い、気に入るか気に入らないかといった、より主観的なものへと変化してきた。機器のデザインへの関心が高まり、感性といったものが高もてはやされた時代であった。

3. 現 在

人々の家電機器への要望は更に進化する。最近の機器への要望、不満の内容をみると、性能、品質、機能、デザインといった機器そのものへの要望というよりも、実際に使ったときの満足といった内容のものがより強くなってきている。いくつか紹介する。

① 自分に合った使いやすい機器 最近の機器は、機能が多すぎて難しく使えないという、世代に関係なく出てくる不満からの要望である。高齢化社会を迎え、今後ますます強くなる要望である。

② 自分だけでなく他人にもやさしい機器 家電

Strive for "People Friendly" Consumer Electronic Products—
Trend in the '90s and in the Coming Century. —

I. User Friendly Consumer Electronics and Electric Products. By
Yoichi Ito (Matsushita Electric Industrial Co. Ltd., Institute of
Human Electronics)

キーワード：物から心へ、自分にあった、人にやさしい、自然・地球にやさしい、創造性、個人差、コミュニケーション

機器を使用する時間が変化している。女性の社会進出に伴う深夜の家事作業により関連機器への静音化要望が高まったのをはじめとして、より人と人との関係への配慮が大事になってきている。

③ 自然、地球にやさしい機器 身近なゴミ処理、洗剤などによる汚れた水、フロンガスなど。今や日常生活と地球環境問題とが密接にかかわり合い、人々の関心も高まってきている。

以上いくつか事例を紹介したが、今後の家電機器を考えるとき、従来以上に人間・生活・自然への配慮がますます重要となる。

4. 21世紀に向けて

人間・生活・自然を重視した家電機器。21世紀を考えたとき、具体的な物づくりにあたり、どんなポイントが大切なのか、我々なりの視点を述べてみたい。

① 創造性、独自性発揮への支援 人は、自分らしく生きたい、自分の力を伸ばしたいと考える。手作りの服や、独自の味付の料理、自分史の創作、微妙な音の演奏、これらにどうこたえられるか。

② プロセスにおける充実感への貢献 プロセスを踏むこと、過程を経ることに充実感を味わうために何ができるか。今はどちらかというところ、やりやすいことだけを機器がやってしまっていて、やりにくいこと、いやなことを人の手にやらせてないか。機器の準備、後片づけ、掃除が人間の役割で、創造的なことは機器がやるという分担になってないか。

③ 心身のバランスを保つ 心と身体のバランスを良くし、健康でありたいと願う人々にどう貢献できるのか。手軽にできるフィットネス、香りや心地よい風、そして音楽や映像でストレスを解消することはできないか。

④ ハイテクを使いやすく親しみやすく テクノストレスを生まない機器とは何か、機器そのものの操作性の難しさの解消も必要となるし、人間に合ったスピード、自体が疲れない形、大きさ、重さといった研究も更に必要となる。

⑤ 人と人とのコミュニケーションの支援 人と人との触れ合い、コミュニケーションは今後ますます大事になってくる。家族の団らんを演出してくれるもの、友人とのつきあいを広げてくれるもの。言語の違う人とも気楽に話ができるようなモノがあれば、より世界がひとつになれる。また老人と子供と一緒に遊べる場所やモノがあればもっと楽しい世の中になるのではない。

⑥ 自然とのふれあい、自然を壊さないための支援

自然に近づきたい、自然の環境のなかで暮らしたい、自然を大切にしたい。これらは生活者に共通する願いといえる。住宅に自然の風や光をどう取り込むか。自然の中に出かけて、安全に楽しむためには。更に自然を汚さない、壊さないための機器のあり方は。やるべき課題がたくさんある。

⑦ 個人差、性差、年齢差への配慮 人間に優しくありたい、優しくしたい。そのためには年齢への配慮、ハンディキャップのある人達への思いやりが大切となる。特に今後高齢化社会が進んでいくと、肉体的衰えを十分理解し、配慮した機器開発が大事になる。

⑧ 安全への配慮 人間というのは間違いをおかすもの。より積極的な安全を願うものという思いが大切となる。より安全にセキュリティを充実させるためには更に配慮が必要となる。特に幼児や高齢者対応が必要だが、更に安全性ということは家庭だけでなく、都市セキュリティの問題、データ保存や個人情報プライバシー問題など幅広い分野へと拡がりをもつ。

以上8項目視点を述べたが、これに「人間の主体性自律性への支援」という視点を加えておきたい。何もかも機器がやってしまうということではなく、本来人間が持っている能力とか素質を考えるなら、機器がやりすぎてはいけない。必要な負荷を人間にかけた方がいいという視点である。

5. おわりに

人にやさしい家電機器ということで、過去、現在、未来と時間を追って考えてみた。機器の進化が人々に新たな生活を提供し、人々の欲求の進化が新たな家電機器の進化を促すということを改めて思い知らされる。戦後のアメリカ式ライフスタイルを目標に、追いつけ追い越せと国・企業・人々が共通の夢を追いつづけた時代を経て、我々自らが新たな夢・生活スタイルを創り出すべき時代に入った。人間・生活・自然といったことを考えたとき、新たに研究し対応すべき課題が山積みしているといった感がある。今回私どもがまとめた内容が、今後の家電機器を考えるにあたり、わずかでも参考になれば幸いである。

(平成3年8月8日受付)

伊 東 陽 一

昭和47年千葉工業大学工業経営学科卒業。同年松下電器産業(株)入社。現在、ヒューマンエレクトロニクス研究所主任研究員。